

笹沢左保

愛人ヨリーコの遺書



集





集英社文庫

愛人ヨーコの遺書

0193-750370-3041

昭和55年11月25日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著者 笹沢 左保

発行者 堀内 末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋 2-5-10
〒101

電話 東京 (230) 6361 (編集)
(238) 2781 (販売)

印刷 大日本印刷株式会社

著者と了解のうえ検印を廃します。 (落丁本・乱丁本はおとりかえします)

集英社文庫

愛人ヨークの遺書

笹沢左保

集英社版

目次

恋の歆びの章		五
揺れ動く女心の章		五五
身辺波乱の章		一〇五
永遠の旅立ちの章		一五七

解説 藤本統紀子

恋の歆びの章

昭和四十八年十月十一日（木曜日）

愛してる。

愛してない。

愛してる……。

幸江が、菊の花びらをむしりながら、繰り返して呟いていた。その幸江の、あどけない横顔。あなたのほうが五カ月もお姉さんなのよって、幸江の幼さを笑ってやりたくなる。わたしも昨日で二十二歳、ちよっぴりオトナっぽい気分にいるのに、幸江は三年前からまるで変わっていない。

それにしても、このお店、何だってまたテーブルの上に花を飾ったりしたのでしょいか。これまで、どこを見渡したって、花なんか見当たらなかったのに。

秋になると、喫茶店の経営者までが、気まぐれになるのだろうか。

「でも、ヨーコ。本当に、綺麗きれいになったわね」

今度は急に、そんなことを言い出す幸江。

わたしは、心臓を握られたみたいに、何となくギクリとした。わたしはあくまでオトナっぽく、気どった顔で菊の花を眺めていた。

でも、内心では当然よ、と思っていたわね。女って、同性からだって綺麗だと言われれば、

悪い氣持はしないもの。

正直な話、自分でも自分の顔が、ずいぶん変わったなって、思うことがある。何というか、女っぽくなったみたい。そう考えたとたんに、胸の奥に甘さが広がった。

彼の言葉を思い出したからなのです。

「ぐんと、色氣が出てきたな」

彼の表現によると、そういうことなのだそうだ。

彼はいま頃、何を考えているかなって、わたしはぼんやり空を見上げた。屋上の喫茶店は、秋の空の下にある。東京の空なのに、いまは真青だ。

雲が一つ。

孤独な雲。

でも、わたしは孤独じゃない。

「ねえ、どうするの？」

幸江が、わたしを見つめた。幼いなりに、深刻な表情だった。ねえ、どうするの——と、これが最近のわたしに対する幸江の口癖になっている。

もちろん、彼とのことを幸江は心配して、言ってくれているのだ。その幸江の好意には、感謝します。でも、どうするのかと訊かれて、こうしますと返事ができることではないのです。

わたしもテーブルの上に、菊の花びらを並べた。幸江のように、声に出して呟いたりはい。それに、愛してない——なんて言葉は、口にする氣にもなれない。

愛してる。

愛されてる。

愛してる。

愛されてる……。

都心にいることが嘘みたいに、静かな秋の昼下がり。

十月十四日（日曜日）

わたしの大嫌いな日曜日。

平和な家庭にいて、よき夫ぶり、よきパパぶりを発揮している彼を、想像しないではいられない日曜日。

わたしだけ、ひとりぼっちの日曜日。胸にぽっかりと穴があき、冷たい風が吹き抜けるような、せつない気持が一段と強まるのは、やっぱり秋の寂しさのせいだろうか。

午後になって、幸江が来る。寂しかったので、わたしは大歓迎。幸江はその歓迎ぶりに、すっかり面喰らったようだった。

当然でしょう。このアパートの部屋は、彼とわたしだけの世界。ミーさまとオレンジ姫の、二人きりの城なのです。だから、わたしは肉親の訪問さえも、許してはいない。

ただひとり例外なのが、幸江だった。このアパートの部屋は、幸江たち三人で借りていて、とになっている。

名前を借りた手前、幸江だけにはここへ遊びに来るぐらいの特権は、与えなければならなかったのだ。

その幸江に対しても、わたしはこれまでソツケなかったし、冷淡だったのに違いない。幸江が帰ると言い出すのを、待っているみたいなのだった。

それが突然、大歓迎されたのだから、戸惑うのも無理はなかった。純情で幼い幸江には、わたしの身勝手な気持も見抜けないことだろう。

もやしラーメンの出前を頼んで、それと幸江が持参のケーキを食べながら、夕方まで話し込んだ。幸江はただ何となく、遊びに来たのではなかった。

幸江は教訓として、わたしに聞かせたい話を、持ち込んで来たのだ。それは、ミーさまとの関係が続けようとするわたしへの忠告、警告であった。

幸江のお姉さんの会社での出来事で、それを聞いた幸江はさっそく、わたしの耳に入れておこうと思い立ったらしい。幸江の精いっぱい知恵だと、わたしは感じた。

「姉が親しくしていた同僚のS子さんが、急に会社をやめたんですって」

幸江は真剣そのものの顔で、話を切り出した。

それによると、S子さんは二十八歳で独身だけど、六つ年上の上司と三年以上も関係が続いていたのだという。

妻子ある会社の上司と独身OLの恋愛関係で、別に珍しいことではなかった。その二人の関係は、社内にも知れ渡っていた。

上司は離婚する日を待つようにと言うし、S子さんのほうもいつかは必ずと結婚を期待していた。ところが突如として破局が訪れ、S子さんは会社をやめてしまった。

「その原因、何だと思う？」

幸江が反応を試すみたいに、わたしの顔を見守った。

「さあね」

わたしは、気のない返事をした。

事実、興味がなかったのだ。ありふれた話だし、それをわたしに聞かせようとする幸江の真意が、読めていたからだろう。

「その上司の奥さんが、お産をしたことなのよ」

幸江は重大さを訴えるように、目を大きく見開いていた。

「そう」

わたしは、つまらなそうな顔で答えた。

「つまり、奥さんが三年ぶりに、二人目の子どもを生んだってわけね」

「だから……？」

「S子さん、そうと知って半狂乱になったんですってよ」

「どうしてかしらね」

「そりゃあ、ショックよ。当たり前でしょ、裏切られたんですもの」

「裏切られた……？」

「その彼はS子さんと愛し合うようになってから、奥さんとの夫婦関係を断っているって、いつもS子さんに言っていたんだそうよ」

「だから、裏切られたってことになるの？」

「だって、S子さんはその彼の言葉を、心から信じていたんだもの」

「そんな子どもダメシみたいな嘘をつく彼のほうもバカみただけで、それを信じていたというS子さんだってどうかしているわ」

「どうしてよ」

「その彼だって三十代でしょうし、奥さんにしてもまだ女盛りのはずよ。そんな夫婦が一つ屋根の下で生活していて、互いに触れ合うこともないなんて、あり得ない話じゃないの」

「でもさ……」

「三年以上もセックスなしで過せる夫婦だったら、もうとっくに離婚しているはずだわ」
「だけど、その話を聞いてわたし、他人事^{ひとごと}って気がしなかったな」

「どうして……？」

「ヨーコのことを、思い出さずにはいられなかったのよ」

「いやあねえ」

「妻子ある人って、結局はそういうものなんだわ」

「まあ、いいじゃないの。他人事として、聞き流しておきなさいよ」

「ねえ、ヨーコ。どうするの？」

また例の幸江の口癖だが、結局は無意味な言葉という感じだ。幸江という幼くて用心深い常識家の忠告も、わたしの反撥を呼び起すだけの効果しかない。

もし、相手が幸江でなかったとしたら、わたしは露骨にいやな顔をして見せたことだろう。わたしの場合は、そんなじゃない。

S子さんみたいな典型的なケースと、わたしたちのことを一緒にしないで欲しい。わたしは幸江に、そう抗議したいくらいだった。いまのわたしと幸江とはレールみたいなもので、交わることがないのに違いない。

いいえ、幸江だけじゃないわ。ミーさまとわたしのことを、にこにこ笑いながら理解してくれる人間なんて、この世にひとりもないのだ。

でも、それでいい。彼とわたしだけ、二人さえわかり合えば、それでいいのではないか。ゴースティング・マイ・ウェイこそ、愛の手段というものだろう。

何となく、気まづくなったみたい。幸江はそう感じ取らなかったかもしれないけど、少なくともわたしのほうは気分がさっぱりしなかった。

ひとりになりたいと思ったし、ひとりになるのが恐ろしいみたいな気もした。彼とわたしだけで、わかり合っていればいいと考える一方で、家庭サービスに努めているミーさまの姿を想像してしまうのは、なぜだろうか。

午後五時、幸江が帰る。

やっぱり、寂しい。せつない。ステレオのボリュームを上げて、ミーさまのパジャマにアイ

ロンをかける。でも、途中で必要のないことだと気づいて、投げ出してしまった。
変なわたし。

ミーさま、あなたが変なわたしにしてしまったのよ。

夕食なんか、どうでもいい。ケーキの残りとコーヒーで、晩の食事は終わり。

九時に、姉からTEL。

自己中心で、身勝手な一日。

幸江、ゴメンナサイ。

これは、野口洋子が二十二歳になった直後の、日記の一部である。

いま、ぼくの手許には合計七冊の大学ノートに書き込まれた野口洋子の日記があるが、それをあえて『遺書』と呼ぶことにする。この『遺書』という名の日記は、昭和四十六年八月三日に始まり、昭和四十九年十二月二十三日で終わっている。

つまり、野口洋子が二十歳になる直前から、二十三歳で死ぬまでの三年と四カ月間の記録ということになる。この三年と四カ月間は、野口洋子の妻子ある男性との恋愛期間に相当する。

野口洋子はその恋愛記録として、若い女性の恋と性の歎き、妻子ある男性との愛の苦悩、複雑な心理の推移、女心による不可解な行動、ユニークな愛人論などを披瀝し、何とも神秘的な死へと辿りつくのである。

ぼくは野口洋子と、たった一度しか会っていない。まったく未知の彼女から、手紙をもらったのは昭和四十九年の四月のことであった。ぼくにとっては、いわゆる読者からの手紙だった。

野口洋子からの手紙には、ある婦人雑誌に載った『妻子ある男との恋愛』についてのぼくのエッセイを読み、一度会って話がしたいと思い立ったと書かれていた。

何とも返事のしようがなかったし、そのままにしておくうちに、ぼくは野口洋子の存在を忘れてしまっていた。一カ月ほどして、彼女から電話がかかった。

それで機会を作ろうということになり、六月の中旬にぼくは品川のホテルのロビーで、野口洋子との最初にして最後の面談をしたのである。その時点での彼女のプロフィールを、紹介しておこう。

野口洋子。

昭和二十六年十月十日生まれ、二十二歳。

長野県上田市の出身。

高校卒。

十九歳のときに上京、大手の製菓会社の本社に勤務。

両親、弟、妹が上田市に在住。

姉が結婚して、東京在住。

身長一メートル五十八センチ。

体重五十二キロ。

バスト八十五センチ。

ウエスト六十二センチ。

ヒップ八十八センチ。

趣味は旅行、音楽、読書。

ぼくの印象としては、『感じのいい娘』であった。美人ではないし、十人並みというところである。だが、笑うと可愛い顔になって、男の保護本能を刺激するようなところがあった。

小柄だが、均整のとれた身体つきで、オレンジ色のワンピースがよく似合っていた。陰湿なところがなくて、若々しく健康的で明るかった。

小麦色の肌をしていて、歯の白さが目についた。やや長めの黒い髪の毛が、美しく感じられた。情熱的だがちょっぴりニヒル、皮肉っぽいものの見方をするが頭は悪くないと、そのときのぼくは観察していた。

ホテルのロビーで、ぼくたちは三時間ほど話し合った。いや、野口洋子から三時間、話を聞かされたというべきだろう。彼女は自分の信念、心境、意見をぼくに聞かせたのである。

それは、野口洋子の恋愛の具体的な体験談でもあった。世間では、それを不倫な恋と呼ぶ。変則的な愛だと、批判的な目で見ると。愛人というレッテルを貼る。だからこそ、現在の自分の体験を貴重だと思うし、その『愛』を大切にしたいのだと、野口洋子は熱っぽい目で力説するのだった。

不倫でも、変則的でもいい。自分はある程度『愛人』と呼ばれることに、誇りを持つ。何より